

## もくじ

### 特集：外国における展覧会

#### ■インタビュー

#### 海外における日本美術

東京大学教授 辻 惟雄氏に聞く

[インタビュー構成/高田都耶子] 4

#### ヨーロッパに所在する 日本美術品の現状と問題点

小林 忠 9

#### 日本美術史研究事情

—アメリカの美術館と大学—

鈴木廣之 12

文化庁・ボストン美術館共催

#### 「王朝貴族の美術」展報告

渡辺明義

松島 健 15

都	我が県の文化行政——㉔	
道	「古代出雲文化」の再生と 地域文化の振興	島根県 19
府	特色ある博物館・美術館紹介——㉕	
県	21世紀を志向する美術館	富山県立近代美術館 22
の	発見 国立劇場の夏 見つけたものはなに /	
バ	第1回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演	24
イ	国立劇場での高校生の夏	内木文英 26
ジ	文化財防火デー (第37回)	28

- ・文化庁行事報告・  
予定 .....29
- ・「美をもとめて」  
放送予定 .....29
- ・芸術文化振興基金  
ニュース .....30
- ・国立劇場ニュース .....31

#### 表紙写真

「王朝貴族の美術」展が開  
催されたボストン美術館の  
外観(上)とその所蔵品  
(左)は馬頭観音菩薩像  
(右)は平治物語絵詞  
(部分)

# 発見 国立劇場の夏

## 見つけたものはなに!

### 第一回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演

#### ■全国高等学校文化連盟事務局

全国高等学校文化連盟は昭和六十一年二月の結成以来、平成二年二月に四十七都道府県の全加盟を達成し、また連盟として五周年目を迎えた。そうした記念すべき年に関係者の御尽力により第一回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演を開催できたことは大変意義深いことである。

高等学校における文化部活動発表の場は、スポーツのそれに比して極めて数少ないだけに、このような企画は、誠に時宜を得たものであった。

開催期日については第十四回全国高等学校総合文化祭（山梨大会）終了後の八月下旬が望ましいということで、平成二年八月二十五日（土）二十六日（日）とした。

会場は国立劇場。公演種目は「演劇」「日本音楽」「郷土芸能」の三部門とし、出演団体の選定については、第十四回全国高等学校総合文化祭（山梨大会）に参加した学校の中から、優秀校を各専門部の責任において推薦するこ

ととした。公演経費については、新設された日本芸術文化振興会からの補助金、及び民間の協賛金等で賄うことにした。

この公演は、主催に全国高等学校文化連盟、東京都高等学校文化連盟、共催に文化庁、日本芸術文化振興会、東京都で実施された。その下に「実行委員会」（十二名）「事務局会」（十六名）「係役員会」（十四名）を設け、第十四回全国高等学校総合文化祭（山梨大会）終了後に、「東京公演実行委員会総合事務局」（仮設）を公演準備のため国立オリンピック記念青少年総合センター内に、期間中（8月9日〜8月27日）設置した。

初日の延べ入場者数は千七百二十三名、二日目は二千二百三十五名の合計数三千九百五十八名という、予想を上回る数となった。

各係生徒や出演者の緊張感が強く伝わって来る中で保利文部大臣と元文部大臣西岡衆議院議員、中島衆議院議員を来賓に迎え開会式

が行われた後、優秀校の発表が始まった。舞台裏では力を出し切った満足感や一種の解放感からくるのだろうか、出演者同士抱き合っ

#### ■郷土芸能

郷土芸能における岩泉高校（岩手）「中野七頭舞」は躍動的でエネルギッシュな踊りであり、まさに若者でなければ踊れない体力の限界に挑戦するような力強いものであった。地元

の保存会の指導者たちも数名付き添い、若い伝統芸能の後継者たちを暖かく見守っていた。また、熊本

#### ■日本音楽

日本音楽においては依然として箏曲が主流ではあるが、雅楽「蘭陵王」に熱心に取り組んでいる奈良の天理高校のような学校もあり、

幅の広さを見せてくれた。また、岩手の盛岡第二高校のように優れた技量をもつ独奏者を中心に編成された琴の演奏や星野女子高校、芦屋南高校のように全体的な和音構成に優れた素晴らしい内容をもつ発表が行われた。

#### ■演劇

演劇は厳しいコンクールを経て優秀校として選ばれただけあって、山梨大会よりさらに磨きのかかった舞台を見せてくれた。脚本の傾向はどれも高校生活を題材とした学園もの

で、青森県八戸北高校「演劇とはなにか……」は多彩な内容を盛り込んだものでしっかりした構成をもっていた。滋賀県高島高校「グラスホッパーストーリー」、鹿児島高校「カラス」等も登場人物の微妙な心理をよく演じ分けていたといえる。群馬県の共愛高校「いつか見た夏の思い出」は熟練度の高い演技を見せてくれた。

#### ■特別出演

この東京公演を盛り上げるために開催地東京都から八丈高校の「八丈太鼓」、白鷺高校、松の緑（日本音楽）、成瀬高校「黒川さん」、川村高校「大森みかぐら」（民俗舞踊）が開会式直前直後に華やかに彩りを添え、二日目は京華女子高校の演劇「赤ずきんーザ・紙芝居」で幕を閉じた。

総じて本公演は優秀校の公演ということもあり、熱気あふれる質の高い舞台が多かった。また、日本の伝統芸能がそれぞれの分野において、力強く現代の若者達に継承され、むしろ若者達に新鮮な感動を与えつつ、活動意欲を醸成させている現状を伺わせるに十分なものがあつた。その意味では、本公演の開催によって伝統芸能継承活動や文化活動への重要性が再認識され、今後、学校における部活動等の中に重きを置く指針を与えたものと評価される。当事務局としては、こうした評価を

踏まえ、この優秀校東京公演を来年度以降も継続実施し、より盛んになるよう努力していきたい。

#### ■優秀校と特別出演校

##### ●優秀校十二校

##### ■日本音楽

- 奈良県 天理高等学校
- 埼玉県 星野女子高等学校
- 岩手県 立盛岡第二高等学校
- 兵庫県 立芦屋南高等学校

##### ■郷土芸能

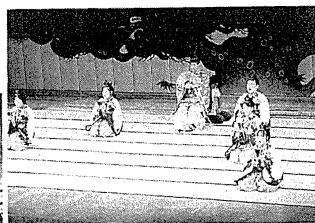
- 愛知県 立安城農林高等学校
- 岩手県 立岩泉高等学校
- 山梨県 日本航空高等学校
- 熊本県 立牛深高等学校

##### ■演劇

- 鹿児島県 津曲学園鹿児島高等学校
- 群馬県 共愛学園高等学校
- 青森県 立八戸北高等学校
- 滋賀県 立高島高等学校

##### ●東京都特別出演校

- 東京都 立八丈高等学校 (郷土芸能)
- 東京都 立白鷺高等学校 (日本音楽)
- 東京都 立成瀬高等学校 (民俗舞踊)
- 東京都 京華女子高等学校 (演劇)
- 東京都 川村学園高等学校 (民俗舞踊)



上 愛知県立安城農林高等学校  
「三河御殿萬歳」  
左 青森県立八戸北高等学校  
「演劇とはなにか……」



# 国立劇場での高校生の夏

全国高等学校文化連盟演劇部会長  
内木文英

平成二年八月二十五日と二十六日の三日間は、私にとって忘れることのできない素晴らしい日であった。私だけでなく、この第一回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演に関わったすべての人々、出場した高校生たち、連日客席を埋めつくした観客の人たちの胸の中に、忘れ難い大会としていつまでも記憶にとどまるであろう。そこには、若い高校生の実力とひたむきな努力によって生み出された、プロの芸能人のものとはまったく別の、活気に満ちた表現があった。この大会のスロガンに「発見/国立劇場の夏」とうたわれながら、期待以上の発見があつて多くの人々たちを感動させた。

私は昭和二十年代のはじめに教育の世界にとびこんだわけだが、その頃から演劇部の指導に夢中になり、生徒たちのためにたくさん戯曲を書き、生徒たちといっしょに芝居をつくってきた。表現する、それをたくさんの人に観てもらおう、それが真実の自分を認識することに結びつくことになろうと感じていた。

高等学校のクラブ活動は、ともするとスポーツ重視に傾いていく。スポーツの持つ健康的な明るさ、ルールを守る精神の重要なことは言うまでもないのだが、だからといって文化活動を軽視していいことにはならない。十代後半の生徒たちに、人間関係を通して人生を考えさせたり、美しいもの、価値あるもの創造に向かつて努力させることがどんなに大切なことか、誰が考えたつてわかるはずのことだ。そうした、高等学校の文化活動が発展していく流れの一つに、今回の国立劇場における東京公演がある。そう、私は私なりに今度のことを位置づけている。

国立劇場が高校生の文化活動の発表に提供される。それだけで十分興奮させられる出来事だった。表現するということは、それを見せたり、聞かせたりする相手がいるということだ。昭和四十七年、高校演劇の全国大会を国立劇場で開いたことがある。劇団四季の浅利慶太さんや、当時国立劇場の舞台部長だった大木靖さんにお世話になった。特に大木さんは舞台に関わるすべての面で先頭に立っていたとき、大会を成功に導いてくださった。今回はどうか。もう十八年も経っている。山梨での全国大会（総合文化祭）が八月はじめて、三週間後の発表ということで、はたしてうまくいくかどうか大いに心配であった。演

演劇だけでなく、絵を画くことも、ピアノをたたいたり歌をうたったり、プラスバンドに打ち込んだり、そういう日常の文化活動が、そのことに参加する生徒たちだけでなく、学校そのものを活気づけるにちがいないと思っていた。このすばらしいものが多くの人たちに理解されて、日本中の高等学校が生徒たちの文化活動を支援するようになるだろう。社会も私たちの運動を支持するにちがいない、と思っていた。おそくてもあと十年か二十年の間にそうなるだろうと思っていたのだ。ところが十年経っても二十年経っても、少しも状況が変わらないのだ。かえって進学率の上昇などが、受験競争にはずみをつけ、教育活動の中の受験に役立たないものを軽視する方向に進みはじめた。もと文部省芸術課の事務官だった北条明直氏（初期の高校演劇の審査員）や劇団四季の浅利慶太氏（高校演劇出身などは、「あなたの目の黒いうちには解決してせんよ」などと、私の夢をうち砕くようなことを面と向かつて言う始末だった。

劇の組織の理事会、総会などで、全国コンクールの上にさらに大会を持つのはおかしではないか、東京での発表は文化の中央集中につながらないかなどという疑義も出された。心配なことも多かったが、期待する声も多く寄せられたりした。特に学校教育の中に演劇を結びつけるべきだ、自己認識をうながすために身体とことばの表現教育は絶対欠かせない、などと考えて運動を続けている人たちにとっては、この大会を成功させてほしいという気持ちが強かったと思う。文化庁、東京都の方々には心から感謝しなければならぬ。そして国立劇場の舞台に関わる方々が献身的に協力して下さったことも、大会を成功させた大きな要因であろうと思う。高校現場側の一員として心からお礼を申し述べたい。

八丈太鼓の素朴な響きで、大会の幕が開かれた。開会式後の東京の高校生による民俗舞踊、日本音楽なども、緊張感のただよう中ではまずまずの出来であったと思う。演劇は山梨の大会で、最優秀賞、優秀賞をとった四校の上演だったが、それぞれが熱演で、観ていて気持ちのいい舞台だった。高校の普通科、体育科の生徒たちの対立をあざやかに表現した津曲学園鹿兒島高校の谷崎淳子作「からす」完成度の高い舞台創造に成功した共愛学園高校（群馬）の市堂令作「いつかみた夏の

徐々に解決のきざしが見えはじめたのは昭和五十年代に入ってからのことだ。文化庁から多額の補助金が出て、高等学校の文化活動を応援しようという動きが見られるようになった。一つは、全国高等学校総合文化祭の開催である。千葉での第一回大会は各分野の文化活動を行っている高校生の参加を得て大成功であった。各都道府県の教育委員会の仕事にこの高校の文化活動が組み込まれたことで、運動に対する理解が大きく前進したように思う。もう一つは、演劇を学校教育の中にとり入れていこうという動きである。普通科の高等学校で「演劇」という科目が成り立つかどうか、その実験授業が、文部省の委嘱を受けて行われた（日本大学鶴ヶ丘高校）。演劇専門コースを持った高等学校が誕生する（東京の関東国際高校、兵庫県立宝塚北高校など）。そうした流れの中で全国高等学校文化連盟が結成される。



ないぎ ふみえ

思い出「新しい角度から演劇部の活動を意欲的に描いた青森県立八戸北高校の戸田昌征作「演劇とはなにか……」、中学時代から大学進学までの男の友情を描いた滋賀県立高島高校の大橋慰佐男作「グラスホッパーストーリー」、そして最後の舞台、東京の特別出演、京華女子高校の神原政常作「赤ずきん・紙芝居」もまずまずの出来であった。

日本音楽では、初日の埼玉県星野女子高等学校の「箏のための協奏曲ファンタジア」が出色の出来であったと思う。その道の素人である私にはやたらな評価はくだせないと思うが、指導者の情熱と生徒たちの努力が伝わってくる演奏であった。奈良県天理高校の雅楽演奏にも圧倒された。

圧倒されたと言えは郷土芸能部門で、岩手県立岩泉高校の「中野七頭舞」はすばらしかった。はげしい練習が繰り返されたのである。地元の人たちが伝統芸能を伝えたいと、必死になって指導したのではなからうか。テナポのある、きびきびして若々しい演技が大きな拍手を呼んだ。熊本県立牛深高校の「牛深ハイヤ節」もすばらしいものだった。

この成功を次の年に結びつけなければならぬまい、と思う。高等学校の文化活動の重要さを多くの人に理解させ、それを力として将来の発展につなげなければならぬ。

編集後記

近年、我が国の伝統的な美術品、文化財の展覧会を外国において開催することが花盛りであるが、このたび、ボストン美術館で開催された「王朝貴族の美術展」も多くのアメリカ人の入場者を数えたところである。このような試みは、ともすれば経済面だけが先行しがちで、諸外国からはなかなか理解しがたいと思われる日本の文化を理解してもらおう絶好の機会であり、文化を通じた国際交流に貢献することになるだろう。逆に、真の国際交流とは文化交流を通じて初めてなされるものであり、我が国がいわば「顔のみえる国」として国際社会で受け入れられるためにも、その役割は今後ますます重要となるだろう。新年を迎え、本誌もより一層の充実を図っていききたいと決意を新たにす次第であり、読者の皆様の率直な御意見をお寄せ下さるようお願いしたい。(A)

「文化庁月報」一月号

(通巻第二六八号)

平成3年1月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
発行所 株式会社ぎょうせい

本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100 東京都新宿区西四軒町4-1-2

電話 (03) 3261-2141 (代表)

振替口座 東京 91161番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定期購読のおすめ

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。  
定価 一九〇円(本体一八四円)(送料四六円)  
年間購読料 二、二八〇円(税込・送料共)

広告の問合せ・申込み先  
株式会社ぎょうせい 営業第二課・宣伝係  
☎ (03) 3269-4145 (ダイヤルイン)

●本誌は、文化庁の編集により発行しておりますが、掲載文は、あくまで個人の責任において、自由に書くことを建前としております。したがって本誌の見解は、文化庁の見解ではありません。